## 3. なぜ12月25日にイ エスの誕生を祝うの ですか。

ニサンの14/15日に当たるイエスの 栄光(復活)は、正確に記憶してい ましたが、福音書が沈黙するイエス の誕生の日付は祝っていなかったの です。イエスの誕生日については三 世紀に至るまで情報がありません。 教父たちと教会著作者たちの最初の 証言には食い違いが見られます。キ リストの誕生を12月25日とする間接 的な証言は、221年、アフリカの人 セクスト・ジュリオによりもので す。イエスの誕生を直接に証言する のは、354年のフィロカリノといわ れる典礼暦で、「12月25日、ユダヤ のベトレヘムでキリスト誕生」と書 いてあります。4世紀になると、こ の日をキリストの誕生日とすること が西方教会の伝統となりますが、東 方教会では1月6日であるとされてい ました。

かなり広く受け入れられていた説明 によると、キリスト者たちが、274 年以来、12月25日をイエスの誕生と 定めたのは、ローマで、太陽が一年 のうちで最も長い夜に打ち勝つ日を 祝っていたからであるという意見で す。この説明の根拠は、降誕祭の典 礼と当時の教父たちが、イエス・キリ ストの誕生と聖書の「正義の光」 (マラキア4,2)や「世の光」(ヨハ ネ1,4他) 双方の間に、平行関係を確 立させたことにあります。しかし、 これを証明するのは難しい上に、当 時のキリスト者が異邦人の祝日をキ リスト教典礼暦に採用したと考える ことは、特に迫害が終ったばかりの 頃ですから、難しいと思われます。 勿論、時が経つに連れてキリスト教 の祝日が異教の祝いを吸収したと考 えることはできます。

もう一つ、納得しやすい説明があります。それは、イエスの誕生日はイエスの託身(受肉)の日付からくる

という考えです。受肉の日はまた、 イエスの死去の日と関係があります。夏至と春分・秋分に関する作者 不詳の書は次のように書いて懐胎である。私たちの主は3月25日に懐胎の日は主の受難と懐胎の日である。その日は主の受難と懐胎の日である。れた(B. ボッテ「降誕とと日であると、他の暦に基づいて、主のとは見のを1月6日に祝っていました。 1月6日の降誕祭と一致するわけです。

受難と受肉の間の関係は古代並びに中世の考え方と一致しています。古代と中世においては、神の偉とないに関連している全体と向に関連していて変や力に感嘆の目を向けれる。これはユダヤ教にもがこれはユダヤ教にがで、創造と救いがこれと同じ考えが歴史を通してキリアと同じ考えが歴史を通してキリア教芸術に反映されています。マリア

の御告げの場面に、天から下ってくる幼子イエスを描いていたのです。というわけで、キリスト信者たそのは、キリストが実現された贖いをそしてなりは、からればなったのは、創造と十字架、創造とキリストの懐胎の間にある関係であった」(J. ラツインガー『典礼の精神』)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/3-naze12yue-25ri-niiesunodan-shengwozhu-unodesuka/ (2025/12/10)